

即興で伝え合う力の向上を目指した授業の考察 —— 英語授業での「話すこと」の教育効果について ——

教育実践力高度化コース

18AD001

相澤 健太郎

【指導教員】 及川 賢 山口 美保 武田 ちあき

【キーワード】 即興的活動 コミュニケーション能力 話すこと 英語

1. はじめに

今日の社会はグローバル化が進み、経済・技術・環境問題などについて、各世代で英語で対話をする機会が広がっている。そのため、実際に「英語が使える日本人」を育成する必要性が高まっている。では、「使える」とはどういったことか。英語は言語のひとつであり、他者とコミュニケーションをとる上で必要となるツールの一種である。つまり、英語が使えるということは、英語を用いて他者とコミュニケーションをとれるということである。ではこれからの英語の授業では、どのようなコミュニケーション能力の獲得が求められているのだろうか。

外国語を用いての豊かなコミュニケーションを行うためには、英語を即興的に使用できる必要がある。話すこととしてのコミュニケーションは基本的には、即興に行われるものであり、外国語も例外ではない。

新学習指導要領における英語の目標は、「英語学習の特質を踏まえ、以下に示す、聞くこと、読むこと、話すこと〔やり取り〕、話すこと〔発表〕、書くことの五つの領域別に設定する目標の実現を目指した指導を通して、第1の(1)及び(2)に示す資質・能力を一体的に育成するとともに、その過程を通して、第1の(3)に示す資質・能力を育成する。」とされている。ここで注目すべきは、話すことに関する領域が二つになったということである。これは、「話すこと」がいかに重要視されているかを象徴するものであろう。二つの話すことに関する領域は、複数の話者が相互に話す場合と一人の話者が連続して話す場合という「話すこと」の特性の違いによって分けられた。そして、この二つの目標は以下のようになっている。

●話すこと〔やり取り〕

- ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合うことができるようにする。
- イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりすることができるようにする。
- ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて述べ合うことができるようにする。

●話すこと〔発表〕

- ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で話すことができるようにする。
 - イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を話すことができるようにする。
 - ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて話すことができるようにする。
- 各々の目標のアを見るとわかる通り、今回の改訂では、「即興」でのコミュニケーションを重要な条件としている。その要因としては、実際の「話すこと」のコミュニケーションの場面において、情報や考えなどを送り手と受け手が即座にやり取りすることが多く、英文を頭の中で組み立てる時間を長く取れないからであると学習指導要領にも明記されている。

英語を意思疎通の道具として使えるようにするためには、日々の授業や言語活動において、実際のコミュニケーションに近い場面を設定し、学習者（生徒）が間違えることを恐れずに英語を多く使う体験を積み重ねる必要がある。

「即興で」とは、「話すための原稿を事前に用意して内容を覚えたり、話せるように練習したりするなどの準備時間を取ることなく、不適切な間を置かずに関心と事実や意見、気持ちなどを伝え合うことである。」（文部科学省、2017:22）

先ほどから述べている通り、これは実際のコミュニケーションを想定した、使える英語を養うための工夫点である。現在の英語授業を見てみると、言語活動を行う場合、原稿を作成し、それをある程度繰り返し練習した上で活動に臨むといった形が多いように思う。しかしそれでは、即興的な伝え合いができておらず、英語を「話す」という力も育成できていない可能性がある。以上のような理由から、「即興的に伝え合う」という活動を研究することが必要性であると考えた。

2. 先行研究の概要

上原他(2017)は、現在の英語教育にて、実際のコミュニケーションに近い場面を設定し、生徒が間違いを恐れずに

発話を行う活動の少なさを危惧している。それと同時に、即興的に伝え合うことの重要性を説き、即興性を育てるためにはどういった指導が必要かを述べている。即興性の向上には次のような条件が必要であるという。

- a. メッセージや意味の伝達に焦点化されていること
- b. 簡単であること（馴染みの話題、表現内容自体に困らない）
- c. 「臨機応変さ」があること（言い換え、聞き返しなど）
- d. 「準備の時間なし」の継続した練習があること（帯活動など）

これらの条件を見てみると、即興性の向上を目指す活動には、まず話す内容が生徒にとって必然性を持たせなければならぬということである。話す内容に意味を含むことがまず重要である。続いて、身近な話題等を扱うことによって、話す内容に困らないということが必要である。仮に、話すテーマとして社会問題等を挙げた場合、まずそれに対する知識、意見がないと、日本語であっても中身のある言語活動が行えない可能性がある。それを防ぐためにも、なじみの話題を使うということは必要不可欠である。そして、活動には臨機応変さが求められる。次に話すフレーズが完全に決まっていたり、生徒自身の意思とは関係なく、話す内容が決まっていると、実際のコミュニケーションからかけ離れた活動となってしまう。現実の会話で相手に伝わらなかった場合、話し手が言い換えたり、聞き手は聞き返したりする。そのような「コミュニケーション」としてなくてはならないものは活動に取り入れなければならない。そして、即興的に伝え合う活動であるため、準備の時間は基本的には取らないということが鉄則である。加えて重要なのが、そのような即興的に伝え合う活動は継続して行わなければならないということである。活動時間は長くなくとも、帯活動のような形で、毎回の授業で行い、かつ月間や年間を通して段階的なものが求められる。

また、山田(2018)は、英語授業において、「考えて話す」ということを重視している。英語を用いてのコミュニケーションを「伝えたい『内容』と、その内容を伝えるための『英語表現』の両者を同時に考えながら（思考・判断しながら）話す（表現する）」ものであるとしている。つまり、「内容」と「英語表現」を同時に思考・判断し、表現するということは、換言すると、この表現活動には即興性が伴うこととしている。「考えながら話す」児童生徒の育成には、次に挙げられるようなことをに気を付けるべきと述べている。まず、英語は間違えながら身につけていくものであるということ、そして、使いながら身に付けていくべきものであるということを理解することである。それを指導するうえで合言葉とし、子どもの失敗を気にしすぎず、長い目で指導していくことが求められる。続いて、年間継続して取り組む指導の学習到達目標を設定するということである。具体的には、○自分の考えと理由を話すこと、

○聞き手の理解を確認すること、○聞き手が理解しやすいように、繰り返したり大切な部分を強調したりして話すこと等である。その他目標の観点として、話題、内容、表現方法、程度に分け、取り組みを行っていくことにも言及している。加えて、既習表現を想起させることも重要視している。見直しをもつ→まずやってみる→想起する→意識して使う、という過程で指導することによって、自分の言いたいことを英語で言えるために使える英語表現を、記憶から引き出すことができるのである。そして山田は、他の論文等でも言及されている継続的な活動、活動時間の十分な確保は必要不可欠としている。

以上、即興性に関する理論的部分を見てきたが、実際の現場で行われた即興性に関する実践を以下に見ていく。

小廣川(2017)は、**impromptu speech** 活動を行って即興で話す力の育成を目指した。小廣川はまずスピーチ形式のプレテストを行い、その後、全6時間計画で活動を実施している。活動後ポストテストを実施し、プレテストとの変容を観察、評価している。プレテストでは、対象者36人中2人がスピーチ形式にそって即興で話せていると評価したが、ポストテストでは36人中30人がそれを行えたと評価している。加えて、事後アンケートも実施し対象者の自己評価も観察している。アンケート内の記述では、「前回よりも長く話せるようになった。長く話せると、話すことが楽しいと感じた。もっと頑張って長く話せるようになりたい。」等の意見が多数見受けられた。即興で話す力を実感したことから、話す意欲も高まったことが分かる。以上のことから、小廣川は、**impromptu speech** 活動を有効なものであると示している。

この **impromptu speech** とは、「その場で与えられたテーマについて行う即興のスピーチ」と述べられている。小廣川は、この活動の根拠として工藤(2013)を引用している。工藤は即興で英語を話すためには、プロセスを踏んで練習することの必要性を述べている。工藤によれば、英語で話す際、まず言いたいことを思い浮かべ、言語化するために加工作業を行う段階とそれを英語でどう言うか処理する段階があるとしている。具体的には、第1段階として、言いたいことが言葉の場合だけでなく、抽象的なアイデアや感情・欲求という心理状態の場合もあるとし、それを英語で話すために、簡単な語に置き換えたり、要点だけに内容を絞ったりする必要があるとしている。次に、言いたいことを英語でどう言うかを処理するのが第2段階であり、定型表現でなければ自分でオリジナルの文を作るために文法力や表現力を駆使することになり、時間がかかるとしている。この二つのプロセスを瞬時に行うことができれば、**impromptu speech** が可能となると述べている。

図1は、即興で英語を話すためのプロセスについて、工藤(2013)の考えを基に小廣川が整理したものである。小廣川はこれを基に、即興で話す力を育成するために、話す内容をイメージする段階と、話す内容を膨らませる段階とを生徒に意識させ、指導を行った。

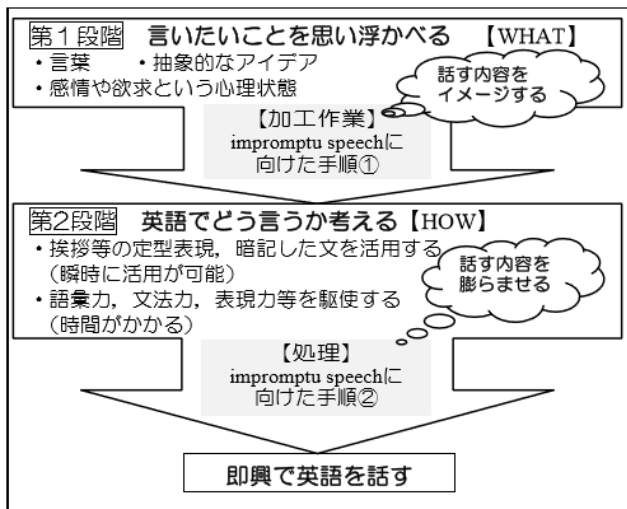


図 1. 即興で英語を話すためのプロセス (小廣川, 2017, p. 3 より)

上記の考え方を基に実際に impromptu speech を行うために、小廣川は「英語のキーワード」に着目している。即興的に話すことは中学生にとっては、非常に困難なことである。ましてや最初の頃は、何から始めればよいのか、どのように話せばよいのか等不安に感じる部分も多く、即興で話す段階までの橋渡しが必要であると述べている。単語レベルでメモを書き、そのメモに基づいて、発話するというプロセスが重要になってくる。これらのメモ書きされた単語等を「英語のキーワード」と呼び、即興で話すための内容の構成に役立たせていると考えている。スピーチを行うにあたっての英語のキーワードの例が以下の通りである。

表 1. 英語のキーワードの例 (小廣川, 2017, p. 4 より)

【スピーチの形式】構成の視点	パターン①	パターン②
【導入】トピック紹介	best friend	classmate
【展開】事実や特徴 具体例や理由	baseball [事実] pitcher [具体例]	kind [特徴] help [理由]
【まとめ】考えや感想	cool	good friend

濱田(2018)は、即興で話すことを目的とした帯活動や以下に述べるレポーティング活動等が生徒の即興で伝え合う力の向上に有効であると仮定し、研究を行った。帯活動やレポーティング活動等の前後で、アンケート及びパフォーマンステスト1、2を行っている。尚、活動は3ヶ月間行っており、約5ヶ月間の研究としている。

まずは、レポーティング活動について説明する。これは「インタビューから得た情報を書いたメモを活用して、情報を正しく伝える」ものである。つまり、活動の手順としてはインタビューから始まる。生徒は、ペアで有名人役とレポーター役になる。レポーターはあらかじめ考えたワークシートのメモをもとにインタビューし、有名人はその人になりきって答える。レポーターは相手の答えをメモする。そしてインタビュー終了後、レポーターは四つ以上の情報

を他の生徒に報告する。インタビュー、発表内容は英文で準備させるのではなく、要点をメモする程度に留めたものである。

続いては、パフォーマンス活動についてである。これは二種類行われ、パフォーマンス1を検証授業前に、パフォーマンス2を検証授業後に行っている。それぞれの内容は以下の通りである。パフォーマンス1では、新規着任したALT に対して自己紹介し、その内容に関する ALT からの質問(三つ以上)に答える。パフォーマンス2では、クラスに新しく来た転校生を ALT に紹介するという場面設定である。転校生の名前や趣味、習慣などの情報が書かれたメモを活用して ALT にその友だちを紹介する。それに関連した ALT からの質問(四つ以上)に答える。ALT とのやりとりの時間は1分間である。ALT に紹介する前に、生徒は情報が書かれたメモに1分間目を通す。

濱田は、あくまで本人の主観ではあるが、観察を通して、3点の研究の成果を挙げている。一つ目は、検証授業にて、明確なゴール設定とその実現に向けた授業の構成、段階的・継続的にアウトプットの言語活動を行ったことで、英語で伝えようとする態度が見られるようになったことである。二つ目は、即興性のある言語活動を行うことで、生徒自ら何を話すのか、どう話すのか考える姿勢が見られたことである。しかし、情報や自分の考えなどを伝える力を高めることができたか、という点では課題が残るとしている。三つ目は、総括的評価として、レポーティング活動やパフォーマンスにおいてルーブリックを作成し、何をどのように評価するのか、評価の視点を定め、それを生徒と共有できたことである。また、日々の指導で継続して形成的評価を行ったことで、教師が指導の過程を振り返り生徒の目標の達成度を把握することができたことである。

3. 先行研究から獲得した知見

まず、即興的に伝え合う力の向上を目指した活動にはいくつ共通する条件が存在すると理解した。大前提として、即興的な活動は、生徒のその場で考えられた言葉でなければならない。そのため、原稿を作ってはならない。(ただし、効果的な活動の促進のため、メモやキーワードを作らせる活動は多く見られた)。

加えて、やはり即興性とは一朝一夕で成せるものではなく、帯活動のような形で継続的に進んでいくことが重要である。さらに、第1学年から第3学年にかけて、簡単なことから難しいことへと段階的に話すテーマを設定していくことも大切である。

そして、工藤(2013)からわかる通り、英語を用いての即興的な会話には、二段階のプロセスが存在する。記述の仕方は違えど、山田(2018)においても似たようなことが示されている。即興的な会話活動は、生徒にとって伝えたい内容があり、それを表現する力が必要ということである。即興性を促す活動を作る場合、伝えたい内容に関しては、上原他(2017)が示す通り、表現内容自体には困らないという

テーマ設定が重要である。加えて、それを英語で表現するには、定型表現のインプットが確実に行われていることや語彙力、文法力、表現力が必要となってくる。これに関しても日々の授業内外での働きかけが不可欠であり、また継続的な支援が鍵となってくるであろう。

4. 実地研究の概要

本研究を進めていくにあたって、現場の教師はどのように「即興的に伝え合う力」を育成しているのかを知ることが非常に重要である。また、自身の授業を設計するうえでのモデルとなるものである。

教職大学院での実地研究により、埼玉大学教育学部附属中学校とS市立A中学校に赴き、長期にわたり授業を参観した。新学習指導要領の施行にあたり、現場の先生方は、「即興的に伝え合う力」の育成をひとつの目標として、授業を工夫し、展開している印象だった。実際にどのような授業が行われていたかを抜粋し、以下に述べていく。

埼玉大学教育学部附属中学校、B教諭の授業をまず取り上げたい。B教諭は授業を行うにあたって、子どもたちが英語を使い、コミュニケーションがとれることを最終目標としていた。生徒がコミュニケーションとしての英語を獲得できるように、授業内に話す活動が非常に多く取り入れられている印象であった。一つ目の例を挙げる。ほぼ毎授業行われていた“Topic Talk”という活動である。この活動では、実際のコミュニケーションを想定した対話を意識させた指導が行われていた。例えば、話し始めるときのあいさつはきちんと行う、相槌やリアクションをとる、相手の言っていることを否定する際は、自分はこう思っていると意思表示をしてコミュニケーションとして成立させる等である。

二つ目の例は、“Triangle Exercise”というものである。これは、“Topic Talk”の進化版ともいえるものであり、活動内容としては、三人組を作った生徒たちが、それぞれ speaker, listener, observer の三役に分かれ、speaker が一分間、あるテーマに関して話し続ける。それを listener は質問等を交えながら聞く。そして speaker が話終えた後、observer が主になって feedback を一分間行う。これをワンセットとして三回行う。

上記の二つの活動を行う際、B教諭は活動後に、生徒が実際に行っていた例を用いて「～っていう質問がされていたね」と良い質問を取り上げたり、良いコミュニケーション例を紹介したりしていた。これを行うことで、二つ目の例で示した「Triangle Exercise」にて行う生徒同士での feedback の質を高める作用もある。つまり、生徒自身がより良い英語、より良いコミュニケーションとはどういったものなのかを理解し、互いに指摘し合い、高め合えるようになることを期待しているのである。

実地研究Ⅱにて、S市立A中学校へ赴き、そこでも様々な授業を参観させていただき、即興的な会話活動またはそれに準ずる活動を拝見することができた。

第二学年にて、C教諭は次のような即興的な会話活動を行っていた。内容は、自分たちが旅行プランナーになりきって、鎌倉にいる外国人観光客にプランを提案しようというものである。第二学年は、鎌倉に校外学習に行くため、総合的な学習の時間にて、鎌倉について調べ学習を進めていた。その情報をもとに、勧めたいスポットを各四人グループで三つ決める。そしてそのスポットについての英文をそれぞれの生徒が書いてみる。そして、作った文章をある程度覚え、それをプレゼンする練習時間をとる。最終的に、教師側 (JT1, JT2, ALT 計3名) が外国人観光客役をやり、彼らに英語でオススメを紹介するというものである。その際、メモは持って良いが、英文をそのまますべて読むことは禁止とする。外国人役の教師側は、「そこは何が有名なの?」「お金はいくらかかるの?」「そこではどんなお土産が買えるの?」などの質問を即興で行い、それに生徒も即興で答えていくという形をとっていた。そして、この活動後、実際の鎌倉での校外学習にて、実際に外国人と話すという活動を行う。

C教諭は、次のように話していた。原稿をそのまま読むことを許さない点や教師側の質問に即興で答えるあたりが、「話す力」の向上に効果的である。また、教師側が生徒たちと直接会話を行うため、どの子が喋れていて、どの子が喋れていないということを見取れる点も非常に良い。

また、同学年にて、「すらすら英会話」というものが帯活動として行われていた。これは、会話例や会話を弾ませる Key question、相槌英語等が書かれているプリントを使用する。それをもとに、ペアで互いに自分のことについて、即興的に話すという活動である。ペアは回転寿司方式で席を移動していき、どんどん変わっていく。そのため、同じトクテーマで何度も違う人と会話ができる形になっている。

第一学年では、D教諭が以下のような活動を行っていた。動詞カード (例 ; I like ~. I read ~. I play ~ 等) を会話のきっかけとした即興的な会話活動である。動詞は何種類もあり、ランダムに生徒全員に配る。そしてそれぞれのカードの動詞を使って、会話を始める。そして動詞カードをきっかけにその内容に関して即興で質問をしていき、会話を続けていくというものである。尚、質問例や答え方、その他コミュニケーションとして注意すべきこと等は活動前に全体で確認する。会話例を以下に示す。

例 ;

生徒 A: Hello.

生徒 B: Hello.

生徒 A: I watch TV.

生徒 B: Oh, You watch TV. What TV program do you watch?

生徒 A: I watch Doraemon.

生徒 B: Good. Do you like Doraemon?

生徒 A: Yes, I do.

生徒 B: What character do you like?

生徒 A: I like Nobita.

生徒 B: Me, too!

以上のような形で会話を進めていた。片方の話を聞いたら、もう片方が話すという流れである。D 教諭は、このような即興的な会話を一年生の頃から続けていけば、会話内容が難しくなっても、話すことに抵抗はもたずに行われるだろうと話している。

5. 実地研究にて獲得した知見

実地研究を通して、先行研究から獲得した知見の重要性を実感した。実際の現場においても、先行研究でも示されている、①原稿を作らない、②継続的に行う、③段階的に行う、④会話のテーマ設定を身近なものにする工夫、等を意識して活動を展開しているのである。

さらに実際の授業を参観する中で、生徒が活動しやすいように、また英語の苦手な生徒の補助となるように定型表現を事前に示すという形を多数目にした。特に第一学年は、まだまだ英語をアウトプットするという事に慣れておらず、またインプットされた英語も少ない。そのため、会話活動に入る前に、使うべき定型表現や活動例を示すことの必要性を感じた。

また、フィードバックの重要性も痛感した。生徒にとっては英語で会話をするということは多くあることではない。そのため、一回一回の活動で着実に成果をあげて、ステップアップしていくことが求められる。それを可能にする要因の一つとしてフィードバックが挙げられる。最初は教師側がアドバイスをしたり、良い例となるであろう生徒の会話例を示したりする。そして、生徒一人ひとりのレベルが上がってきたら、生徒同士でのフィードバックは非常に意味のあるものになると考える。

6. 研究の目的

本研究の目的は、中学生の「即興で伝え合う力」の育成を目指した授業を設計することである。最終的に育てほしい生徒像は、即興的に英語を用いて、数分間会話が行えることとする。

7. 研究方法

効果のあった実践例を参考に自身の授業を設計していった。実地研究にて授業を参観し、そこで獲得した知見をもとに授業の再検討を行った。最終的には、自らの設計する授業を行い、授業の前後での生徒の変化を観察した。

8. 授業の設計と実践

先行研究等より獲得した知見から、以下の三つの点に絞り、授業に取り入れることにした。

①原稿を作らない

→即興的な会話活動を行うにあたっての不可欠な部分で

あり、最重要事項である。黒板に、キーワードになる文や単語を事前に示し、それを基に、コミュニケーションを行ってもらう。

②表現内容自体には困らないテーマ設定

→授業の時間の中では、新出文法の正しいインプットと、それを使っての適切なコミュニケーションをとってもらうことに焦点を当てている。そのため、英語で表現を行う際に、話す内容は悩まないように、身近なテーマを選択する。

③定型表現を示す

→会話活動を行う際、そのヒントとなる単語やフレーズを活動前に示しておく。また、このような質問にはこのように答えるという、コミュニケーションの形も示す。

B中学校の第一学年にて授業実践を行った。活発な生徒が多く、英語への意識も比較的高い学年である。授業内にて多くのインプット活動を行っており、一年生としては十分な単語に触れていると考えられる。しかし、英語の得意な生徒と苦手な生徒の差が大きいのも特徴的な学年であったと感じている。

単元は、*SUNSHINE*①のPROGRAM 4「リサイクル活動」である。本時は1/2時間目であり、文法(What)の導入、定着に焦点を当てて、授業を構成している。本時の目標としては、・Whatを正確に理解できる。・Whatを用いて話したり、文字を用いて表現したりできる。の二つを設定した。授業内容は以下の通りである。

●で示すものが、学習活動、学習内容等

◎で示すものが、教師の指導上の留意点等

○で示すものが、評価の観点等

1. ウォームアップ

●あいさつ

●Not count 15 Game

・数字の復習(教科書 p. 29)

◎数字の復習を行ってから始める。

◎時間を決めて、その時間内で何回も活動するように指導する。

2. 復習

・アクションコーナー(教科書 p. 34)

◎後の活動を意識し、動詞の定着を目指し、音読する。

◎発音に留意する。

3. What の導入

●Do you watch イッテQ on Sunday? →生徒に聞く

◎“No, I don't.”と答えた生徒にWhatを使い、自然な流れで導入してもよい。

●「何」見てる?はどのように言うか。→生徒に聞く

板書

What do you watch on Sunday? ↘

I watch イッテ Q.

- ◎Whatの定着を目指し、リピート練習をする。
- ◎テレビを見ない生徒がいた場合は、それを拾って、“I don't watch TV.”を導入する。

4. What の文章で do を導入

- ①先の板書を例に、「日曜日は何しているの？」と聞く。
 - ◎「している」に注目させる。
 - ◎What、on の意味に軽く触れる。
 - ◎gamesの複数形の s に注目させる。
 - ◎リズムに乗せてリピートし、暗記させる。

板書

What do you do on Sunday?

例) I play soccer.
I watch Youtube.
I play games.

- ②ペアで聞き合う活動
 - ・活動 横ペア×1、縦ペア×1
 - ・教師からフィードバック
 - ◎良いコミュニケーション例があればフィードバックにて共有する。

5. What を用いた即興的会話活動

- 教師がデモンストレーションを行う。
 - ◎質問を二つしていることに注目させる。
 - ◎会話の型を提示する。

板書

Q. What do you do on Sunday?

A. I play baseball.

Q. Do you like baseball?

A. Yes, I do. I like baseball.

- 20 secs chat ! [ペア活動]
 - ・横ペア×1、縦ペア×1
 - ◎デモや板書を例に、ペアで活動を行わせる。

- ◎活動終了ごとに、フィードバックを行う。
- ◎フィードバックにて、リアクションを意識させる。

●30 secs chat ! [ペア活動]

- ・活動 横ペア×1、縦ペア×1
- ・活動 友達三人と話す。
- ・生徒一組以上に発表してもらう。
- ◎先の活動を発展させられるように、質問を一つ以上増やすように促す。
- ◎質問例として、Why? Because....等を示す。
- ◎フィードバックにて、良い例を共有する。
- 即興的に英語を用いることに留意し、且つ自分の意見を聞き手が理解しやすいように表現できている。
(コミュニケーションへの関心・意欲・態度) [活動の観察] (Speaking)

6. 会話活動を基にした、書く活動

- ◎行った会話を基に書けるように促す。
- ◎書くことが苦手な生徒に対しては、板書を参考にするように指導する。
- 会話した内容に基づき、相手に正しく伝わるように、英語で書いて表現できる。
(外国語表現の能力) [観察及びノートの記述] (Writing)

7. まとめ

- ◎本時の振り返りを行う。
- ◎What の用法を再度確認する。

8. あいさつ

以上が実践した授業の内容である。以下にこのパートの冒頭で述べた、授業にて意識した三点を中心に、工夫点を述べていく。

①原稿を作らない

本授業の中盤では、新出文法である what を使って、原稿は作らず即興的な会話活動を行った。しかし、授業を実施した学年が第一学年ということや、普段あまり即興的に英語を使う機会を作っていないということを考慮し、ある程度の会話内容を黒板に示すこととした。

②表現内容自体には困らないテーマ設定

本授業での活動では、教科書の本文にもある「日曜日は何しているの？」をテーマとした。一年生にとっても、自身の日曜日の予定であれば、話す内容には困らないであろうという推測もとの設定である。また、教科書本文の一部ということもあり、次回の授業にて扱う本文自体の理解促進にもつながると考えた。

③定型表現を示す

活動を行う上で、黒板にある程度の表現例を示し、また、会話の流れや使うべき英語も同時に示した。生徒の会話内容の理解促進と、活動を円滑に行うことを期待しての手立てであった。

9. 研究の成果と課題

本研究にあたり、授業をさせていただいたクラスは、約三ヵ月授業を見させていただいたり、学校での補習にも関与させていただいた。そのため、ある程度生徒各々の英語力は把握している状態で、授業に臨むことができた。尚、研究にあたり、アンケート等は行うことができなかった。

授業を行う際に注目していた部分は、◎生徒の会話力がどの程度向上するのかということ、◎英語の得意な生徒、苦手な生徒がどのように会話活動を進めていくかということである。

◎生徒の会話力がどの程度向上するのか

授業は1回のみであったため、その授業のみで会話力を向上させるということは困難である。しかし、活動にて、自分の言いたいことを授業者からのヒントなしで話せている生徒が多く見受けられた。

普段の授業にてD教諭は、教科書のアクションコーナーを中心に、動詞のインプットを多く行っている印象であった。

その成果もあり、活動内では、多くの生徒が自分の言いたいことを授業者からの補助なしで話せていた。また、自分の言いたいことを伝えることに苦しみ生徒も授業者の補助によって言いたいことが相手に伝えられ、コミュニケーション自体にしっかり意味を持たせることに成功していた。あくまで筆者からの主観であるが、普段の授業に比べ、多くの生徒がアウトプット量を増やし、非常に充実したコミュニケーション活動ができていた。

今後、継続して会話活動を行っていくことによって、インプットした知識の定着、アウトプットする技術が高まっていく可能性がきわめて高いことが予想される。

◎英語の得意な生徒、苦手な生徒がどのように会話活動を進めていくか

今回の授業にて、得意な生徒、苦手な生徒に注目した要因は以下の通りである。得意な生徒は普段インプットばかりの授業だと飽きてしまう。しかし、即興的会話活動のようなアウトプット力が試されるものは、英語が得意な生徒にとっては見せ場になるのである。また、授業者や他の英語が得意な生徒と会話を行うことで、得意な英語を存分に発揮し、自身の能力の確認ができ、またここが話せなかったという次への英語のモチベーションにつながるのである。

授業の中で、一人秀でて英語の成績が良い生徒がいた。

その生徒はすでに中一のレベルを超える英語力を備えていたが、会話となると自分の言いたいことを十分に伝えることが困難である様子であった。この活動を通じて、彼は自分自身の課題点も見つかったと話してくれ、今後の会話活動への意欲を見せてくれた。

一方、英語が苦手な生徒にとっては、会話活動はハードルが高い可能性がある。たしかに、英語の知識、技量が不足していても、英語での会話を「楽しむ」ことができる生徒にとっては良いアウトプット活動となったであろう。しかし、授業の中でも、自身のインプットに自信がなく、中々話せない生徒も少なからずいた。今回の授業において、そのような生徒には積極的に声をかけに行き、会話のヒントとなるようなフレーズを伝える、本人が伝えたい単語を教えてあげるといった補助を行っていた。また、本授業を行ったクラスは助け合いの精神ができており、英語が得意な生徒が苦手な生徒と積極的にコミュニケーションを取りに行き、わからないところは生徒同士で教え合っている姿があった。そのおかげもあり、英語に苦手意識のある生徒たちもコミュニケーションを楽しむことができていた様子であった。

そして、授業後に数人と話す機会があり、その中で、「英語は苦手だったけど、そんな私でも英語を使って話すことができてうれしかった。」と言ってくれる生徒がいた。このような気持ちを大切に、英語を使うことに臆することなく、多くのアウトプットを行ってほしいと考える。また、アウトプット活動を行ったことによって、現時点のインプットの不十分さを実感してくれた生徒も少なからずいた。英語をもっと話したいという気持ちを原動力にインプットの充実もぜひ頑張っていってほしいと思う。

以上述べてきたように、即興的な会話活動は非常に意味のあるものとなる。一度の授業でもこれだけの手ごたえがあった。そのため、今後継続して行っていき、少しずつ活動のレベルを上げていけば、生徒のスピーキング力は上がっていく可能性は高いと考える。

たしかな手応えを得られた一方、課題に感じることもいくつかあった。それらを以下に述べていく。

まず課題に感じたことは、やはり英語を苦手とする生徒にどのようにアウトプットを行っていくことを促進できるかということである。英語を苦手とする生徒はコミュニケーション活動のようなアウトプットを必要とするものに拒絶反応を起こしやすい。最悪の場合、そのような活動をきっかけに、英語を嫌いになってしまう可能性もある。そのため、英語を苦手とする生徒がいかに楽しく、また、他の生徒と自分を比べることなく、英語の力を伸ばしていけるかを考えることは非常に重要なことである。今回の授業において、授業者は補助的なことは行ったが、十分なものは言えなかった。英語を得意な生徒も苦手な生徒もともに楽しみつつ、ともに自分のペースで成長を実感できるような活動を今後探求していきたい。

もう一つの課題として以下のものがある。本授業を終え

て、インプットとアウトプットの機会を適切に保持する授業を設計することの難しさである。一方で、その重要性も痛感した。英語はインプット活動だけでもアウトプット活動だけでもいけない。十分なインプットを行ったのち、それを使えるところまで昇華しなければならない。そのためには、通年でインプットとアウトプットの機会を交互に作り、生徒自身がインプットしたものをアウトプットできたという体験ができるように、授業を考えていかなければならない。今後もこの課題点を念頭に置き、授業の改善及びカリキュラムの設計に臨んでいきたい。

10. おわりに

以上示した通り、これからの子どもたちは英語を用いてのコミュニケーションを行えることが求められる。それに即して、即興的に英語を使つての伝え合いができる力の育成が必要になってくる。そのため、本研究の重要性は高いと認識している。本研究を通して、実際の生徒の活動の姿や活動によってどのように変化をするかを観察でき、非常に意味のあるものになったと自負している。しかし、本研究における検証授業は一度きりのため、継続的、段階的に会話活動を行っていった際の生徒の変化は観察できていない。今後自身が現場にて授業を行っていく際に、そのような長期的な視点をもって、授業を展開していき、実際の成長を観察したい。

本研究を通して、「即興で伝え合う力」の向上には、必要となるいくつかの要因があることがわかった。それを踏まえ、今後も先行研究や過去の実践例から研鑽を積んでいき、自分自身の授業を行ううえでの力量を高めていきたい。加えて、本研究を終えて残った課題点については、今後授業を行っていく中で、解決していきたい。

11. 主な引用・参考文献

- 上原景子他. (2018). 「英語教育における流暢さと即興力の育成 —中学生の話すことにおける意識の一考察—」 『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』 67, 177-196.
- 胡子美由紀. (2018). 『即興スピーキング活動』 東京：学陽書房.
- 圓入由美. (2017). 「政策策定の現場から—新学習指導要領における外国語教育における取組—」 『学術の動向』 22(11), 88-93. 公益財団法人日本学術協力財団.
- 小廣川和恵. (2017). 「即興で話す力を育成する中学校外国語科学習指導の工夫 —英語のキーワードを基に話す内容を構成する“impromptu speech”活動を通して—」. http://www.hiroshima-c.ed.jp/center-new/kenkyu/c houken/h29_kouki/kou14.pdf
- 工藤洋路. (2013). 「‘impromptu’な話す活動の実践に向けて」 *Teaching English Now* 25, 10-11. 三省堂.
- 三野宮春子. (2017). 「即興的発表型と即興的やりとり型のアクティビティ —問題解決ゲーム SOLVERS の開発と

コミュニケーション分析—」 『関西英語教育学会紀要』 41, 21-40.

高橋成周他. (2015). 「中・高等学校英語科における『話す力』を高めるための指導の在り方に関する研究」. http://www1.iwate-ed.jp/kenkyu/siryou/h27/h27_0904_1.pdf

田村岳充. (2018). 「いまから始める『即興のやり取り』への第一歩」 『英語教育』 2018年12月号, 大修館書店.

濱田真美. (2018). 「言語活動を通して、思考力、判断力、表現力等を育む指導と評価の在り方についての研究—学習到達目標の達成を目指した『話すこと』の段階的な指導を通して—」 http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310308/files/2017052500202/file_20175254172939_1.pdf

林 秀多. (2016). 「中学校英語科において即興性を高める指導の工夫 —帯学習の中で、基礎・基本の習得と即興的なコミュニケーション活動を行う 学習シート『Hello』の活用を通して—」. http://www.nc.center.gsn.ed.jp/?action=common_download_main&upload_id=6753

久万瑞帆他. (2017). 「話す力を伸ばす指導とその効果—口頭で写真や絵を説明する力を例にして—」 『中国地区英語教育学会研究紀要』 47, 53-62.

松尾砂織. (2016). 「中学校英語科におけるスピーチ活動の指導—『ものを紹介しよう』の実践を通して—」 『広島大学附属三原学校園研究紀要』 6, 243-248.

文部科学省. (2016). 『英語教育改善のための英語力調査事業（中学校）報告書』. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/07/28/1388570_1-1.pdf

文部科学省. (2017). 『中学校学習指導要領 解説 外国語編』.

山田誠志. (2018). 『「考えながら話す」小学校英語授業—使いながら身に付ける英語教育の実現—』 東京：日本標準.

古澤孝幸. (2014). 「言語活動における『即興力』の育成—『メモに基づいたスピーキング指導』を通して—」. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shoto u/102/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2014/06/30/1348956_06.pdf